研究論文

保育士養成課程における「絵本の読み聞かせ」に関する一考察
－保育所保育指針の領域「言葉」に着目して－

大村　綾

西九州大学短期大学部　幼児保育学科

（令和6年1月10日受理）

A Study on "Reading Picture Books to Children" in the Students of Childcare Worker Training Courses: Focusing on the area related to "Language" in the "Guidelines for Nursery Care and Education at Day Nurseries"

Aya OMURA

（Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior College ）

（Accepted January 10,2024）

Abstract

Based on previous research and the Guidelines for Nursery Care and Education at Day Nurseries, this study summarized the importance of reading picture books in childcare and discussed the guidance required of training schools in teaching reading. As a result, the following two points were summarized. (1) Picture books are a communication tool with children. And it is one of the important items in forming trust and attachment relationships with adults. (2) It is important for caregivers to select picture books with intention and read to children in order to help them develop rich experiences, knowledge, and activities. However, students studying childcare tend to be highly aware of the techniques of reading aloud to children, and less aware of the meaning and significance of reading aloud to children, as well as the intention of caregivers to incorporate picture books as teaching materials in childcare practice. We believe that this will be one of the key perspectives to be emphasized in the teaching of reading aloud at Nursery Teacher Training School.

Key words:　領域「言葉」：area related to "Language"
絵本：picture book
読み聞かせ：reading aloud to another

1. はじめに

2001年12月、子どもの読書離れに対する懸念等を背景に、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定された。この法律によって、自治体の読書政策や地域住民の読書活動が活発化され、子どもが手を伸ばせばそこに本があるという、読書環境の整備が促進されることになった[1)]。このような取り組みにより、子どもたちにとって本や絵本はより身近なものになり、読書の機会や時間増に繋がっていることが期待される。幼少期の子どもたちが過ごす保育園や幼稚園、認定こども園でも、日々の保育の中で絵本の読み聞かせは積極的に取り入れられ、単なる機会や時間の確保だけではなく、それを支える場所や空間、環境にも配慮され、家庭や園で保護者や保育者、子ども同士のふれ合いの機会としても捉えられている。

一方、若者世代の読書について見てみると、全国大学生活協同組合連合会の学生生活実態調査では、一日の読書時間（電子書籍含む）が０分の大学生は、2011年に36.7％であったのが2016年には49.1％、2021年には50.5％に増加しており、若者世代の読書離れが進行している[2)]。先行研究でも若者世代の読書離れの指摘は以前からなされており、平山[3)]は「大学生は確実に読書から離れていっている」と断言する。また、吉田[4)]は読書をする大学生と読書をしない大学生の二極化を指摘しており、そこには読書が楽しい学生と楽しくない学生の二極化、読書時間のある学生とない学生の二極化が内在していることを明らかにした。さらに興味深い研究として、工藤[5)]は保育を学ぶ学生の絵本を読解する力は年々低下しているとし、言葉と言葉の行間の意味や、絵の中の言葉を読むということが難しくなっていると指摘している。このような若者世代、とりわけ大学生の読書離れ、活字離れの傾向が、保育士養成課程の学生にも同様にあると想定した場合、工藤が指摘する絵本を読み解く力はさらに低下することが危惧される。そして、絵本を読み解く力の低下は、子ども達への読み聞かせの質にも影響するのではないだろうか。そのため、保育者養成校が担う学生への絵本の読み聞かせ指導は、今後さらに重要な課題の一つになると考える。

そこで本研究では、保育での絵本の読み聞かせの重要性を整理するとともに、保育所保育指針で示されている絵本の読み聞かせの記述から、求められる指導について検討していく。

2. 子どもにとっての絵本

広辞苑[6)]によると、絵本とは「絵を主体とした児童用読み物」と説明されている。さらに保育学用語辞典[7)]では、「絵本は1人で読むだけではなく、複数（集団）で読み合うこともでき、その場合には読み手が絵本の文字を読み、聴き手は読み手の声を聴きながら絵をじっくり見て、両者の関係のもとに絵本世界を一緒に楽しむことができるものである」と説明されている。また「乳児も読み手との関係のなかで絵本と出会い、身体を用いて絵本にかかわり（ページをめくる、絵を指さす等）、絵本世界と自分が生活している現実世界を対応させることを繰り返し楽しみ、次第に絵本世界から想像世界へ広げ新たな活動を展開していく」と説明されており、言葉でのコミュニケーションが未発達な乳児にとっても、絵本は会話や遊び、コミュニケーションのきっかけになるものとして理解することができる。このようなことから、絵本は「対話性の高いメディア」[8)]と位置付けられ、「子どもの人間形成に資する教育文化」[9)]であると説明されている。

保育、幼児教育の実践に目を向けてみると、絵本はさまざまな場面で活用されており、日々の保育に欠かせない保育教材の一つとなっている。先述の通り、年齢によっては１人で読むことを楽しむアイテムでもあるが、集団の中で読み聞かせるためのアイテムとして活用されることも多い。真﨑[10)]は、絵本を「幼児の情操教育に大きな役割を果たし、子どもの想像力と創造性を養い、絵によって物語の世界へと誘う」ものと述べている。絵本を通して考え方、思考力のほか、想像力や豊かな心が育まれ、その経験は社会を生き抜いていく上で大いに役立つものと捉えることができる。また野口[11)]は、保育者向けの文献において、絵本が育むものとして①想像力･思考力、②ことばの発達、③ルール･思いやり、④知識･好奇心、⑤聞く力･集中力の４点をあげ、子どもの育ちにおいて絵本が重要な役割をもつと説明している。

同様に、乳幼児期の絵本の重要性については、保育所保育の基本となる考え方のほか、保育のねらい及び内容が示されている保育所保育指針においても明記されている。具体的には、第１章総則にある小学校入学までに育んでほしい姿や能力の目安として示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」において、以下のように示されている。

> ケ：言葉による伝え合い
> 保育士等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

ここからは、さまざまな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことを言葉で表現し、他者に関心を持ち、相手の話に興味をもって聞くことで「言葉による伝え合い」が育まれること、そしてその手段の一つとして絵本が位置づいていることが読み取れる[12)]。これは保育所保育

に限ったことではなく、幼稚園教育要領[13]や幼保連携型認定こども園保育・教育要領[14]でも同様に示されており、我が国の保育、幼児教育において絵本は子どもの成長や発達において欠かすことのできないものだと理解することができる。

また、絵本は保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の言語領域にある「ねらい」や「内容」、「内容の取扱い」において、言葉の発達や獲得のための具体的な教材として取り扱われており、保育や幼児教育では「幼児の豊かな想像性や言語に対する感覚を養う重要な教材」[15]にもなっている。

このように、絵本は子ども達にとって単なる読み物ではなく、絵本の内容を通して言葉に触れ、想像性や感性を養い、発語にもつながるものとして理解することができる。また、絵本を介して読み手とコミュニケーションを図ることで、言葉を通した相互作用が働き、言葉の獲得、心の成長の契機にもなる。すなわち、子どもの育ちにおいて、絵本は重要な役割をもつものであると理解できる。

3. 読み聞かせとは

言葉や文字の理解、獲得の発達過程にある乳幼児の絵本とのかかわりにおいて、大人からの絵本の読み聞かせは大きな意味をもつ。そのため、保育、幼児教育でもさまざまな場面で絵本の読み聞かせがなされている。馬見塚[16]は、保育における読み聞かせは、まだ自分で読書ができない子どものために大人が代わって読むことがそもそもの趣旨であるとした上で、クラスなど多人数の子どもの保育に対応するために、多くの子どもを対象に読み聞かせを行う場合があるが、本来は大人と子どもとの信頼関係を深めるためにも、大人の膝に抱っこをしたり、脇に座らせながら一緒に読む形が自然で望ましいと指摘している。

また真﨑[17]は、読み聞かせとは大人自身がまず本を楽しみ、子どもに「一緒に読もう、楽しもう」という想いで本を読み、自由な反応を得ながら、共に絵本の世界を楽しむという、共有・相互交流性や遊びの要素をもつものと定義している。大人が子どもに一方的に知識や聞く力を植え付けるためのものではなく、大人自身が相手のことを思って行うもの、そして子どもとの交流によって大人も絵本と出会い、子どもから刺激を受けるものであると説明する。このように大人が学ぶ要素も大きいという指摘から、読み聞かせを通して双方の学びや育ちが期待されることが分かる。これらの見解から、読み聞かせは大人の自己満足ではなく、子どもを主にした行いであり、読み手と聞き手が共に楽しむものであると理解することができる。

さらに横山と水野[18]は、幼稚園５歳児クラスの読み聞かせ場面に着目し、その実際を踏まえ、読み聞かせの意義を２点挙げている。１点目は、保育者（読み手）と子ども達（聞き手）の安定した信頼関係の上に積み重ねられる共有体（一体感）という捉え方である。つまり、日々の保育の中で保育者と子どもが紡いできた関係の上に絵本体験が重なっており、さらに絵本体験が双方の関係を強めると捉えている。２点目は、絵本と子どもの生活の連続性が可能となる読み聞かせという捉え方である。日常的に子どもと生活を共にする保育者は、子どものことをよく理解した存在となる。その保育者が子どもの生活や興味、発達に即した絵本を選書し、その絵本の内容を通して子どもの生活や体験、経験が豊かになっていく。つまり、子どもの過去、現在、未来の生活につながる絵本を、保育者だからこそ選ぶことが可能となると言う。横山らの研究からも、読み聞かせでは、読み手と聞き手の双方の安定した関係性の構築が期待され、絵本が生活や遊びの延長線上にあるものとして理解することができる。

4. 保育における読み聞かせの取り入れ方

以上より、絵本は子どもの育ちや発達に重要な役割をもつと整理することができる。それと同時に、保育者にとっても貴重な保育教材の一つでもあると言えよう。そのため、保育者の絵本の取り入れ方によって、子どもの学び、経験、活動の広がりに大きな違いが生じると言っても過言ではない。では、保育の場面においてどのように絵本を活かしていけば良いか。ここからは、子どもの育ちを乳児（すなわち０歳）から捉えている保育所保育指針とその解説書の内容に着目し、「第２章保育の内容」にある「言葉」の領域で示されている、絵本の読み聞かせの記述から、保育における読み聞かせの取り入れ方について検討していく。

（１）乳児期の読み聞かせ

保育所保育指針第２章保育の内容「乳児保育に関わるねらい及び内容」の「精神的発達に関する視点」にある「身近なものと関わり感性が育つ」の項目の「内容」において、次のように示されている。

①身近な生活用品、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ。

身の回りの環境に対する子どもの興味や好奇心は、その生活を豊かにするとともに、この時期の心身の発達を促すことにつながる。さらにこの時期の読み聞かせは、一対一の関わりが中心になるため、保育者からの読み聞かせでは、「知っているものの絵を見付け、指差してその喜びを保育士等に伝える」姿が見られるようになる[19]。また、この時期は音を楽しむ時期でもあり、オノマトペや言葉のリズミカルな繰り返しを好むのも特徴である。その

ため「気に入ったページを何度もめくって前後の展開を繰り返し楽しんだり、語りの声の調子やフレーズに耳を傾け、その音の響きやリズムに合わせて体を揺らしたり自分も声を出したりする」。この様子に保育者は「温かく応答し」、「味わっている世界を共有する」ことが求められる。特に乳児期は特定の大人との愛着形成が重要とされており、そのツールとして絵本の活用が有効であると理解できる。

（2）1歳以上3歳未満児の読み聞かせ

次に1歳以上3歳未満児の保育では、言葉の獲得に関する領域である「言葉」の「ねらい」において、以下のように示されている。

> ③絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

この時期になると、「絵本や物語などに登場する事物や話の展開、言葉の響きなどを保育士等と一緒に楽し」むようになる。そして絵本や紙芝居、物語を通して新たな言葉に出会い、知った言葉を使おうとする姿も見られるようになる。また「ごっこ遊びなどの中で保育士等と言葉のやり取りをしたりする経験を通して、言葉の意味するものや話されたことの内容を徐々に理解するようになり、言葉で伝え合うことの喜びや言葉により心を通わせる楽しさを味わう」ようになる[20]。このような経験の積み重ねにより語彙数を増やし、多様な表現に触れ、言葉を交わす楽しさを知り、その態度を養っていく。さらに領域「言葉」の「内容」には次のように書かれている。

> ④絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣したりして遊ぶ。

この箇所について解説では、「繰り返し読んでもらうことで、子どもは登場人物の真似をしたり、身体で表現したりして遊ぶようになる」とし、絵本に出てくる動物の動きからまねっこ遊びへの発展、話の内容からごっこ遊びへの発展など、保育での絵本の活用事例が示されている。さらに領域「言葉」の「内容の取扱い」では、保育内容の適切な展開について示されており、解説では絵本による子どもの指差しに対して、保育者が丁寧に言葉を補いながら応答、反応することで子どもの言葉が豊かになり、言葉で補える世界観が広がることについて、具体例を挙げながら説明されている。すなわち、読み聞かせは単に絵本を読んで聞かせるという行為に留まるのではなく、保育者側の何らかの意図をもって読み語られ、そのことがその後の子どもの豊かな経験や知識、活動に繋がるものとして捉える必要があると理解できる。保育の実践では、これらのことを念頭に絵本の読み聞かせを取り入れていくことが求められよう。

（3）3歳以上児の読み聞かせ

次に3歳以上児の読み聞かせについて、領域「言葉」の「ねらい」では以下のように示されている[21]。

> ③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。

この頃には話し言葉が一応できあがり、日常生活で普通の用事を足せるほどに会話が上達する。それまでに習得した言語能力に加え、日常体験も豊富になるため、会話の内容も徐々に複雑化していく。そのため、保育では絵本や物語を通して「言葉の楽しさや美しさに気付いたり、想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らし、その思いなどを保育士等や友達と共有したりすることが大切」になってくる[22]。

また領域「言葉」の「内容」には次のように書かれている。

> ⑨絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。

現実には自分の生活している世界しか知らない子どもにとって、読み聞かせは様々なことを想像する楽しみと出会う契機となる。解説書でも「絵本や物語の世界に浸る体験が大切」と明記されており[23]、読み聞かせでは「楽しさを十分に味わうことができるよう、題材や子どもの理解力などに配慮して選択し、子どもの多様な興味や関心に応じることが必要」と説明されている[24]。

また「内容の取扱い」では、絵本を通した環境について触れられている。具体的には、絵本への親しみが深まる中で「絵本が子どもの目に触れやすい場に置かれ」ていること、「落ち着いてじっくり見ることができる環境がある」ことが重要とされており、これらを通して子どもと絵本の出会いがより一層充実していくことが期待されている。そのためにも「保育室における子どもの動線などを考えて絵本コーナーを作っていく」ことが求められている[25]。

さらに、読み聞かせを通して絵本の世界を楽しみ、いろいろな言葉に出会い、親しめるようにすることも重要とされており、絵本などを通して美しい言葉に触れ、豊かな表現や想像する楽しさを味わえるようにすることも必要とされている[26]。今日の保育、幼児教育では「環境を通しての保育・教育」が基本とされており、子どもたちが自ら主体的に絵本を手に取り、見たり楽しむ経験も大切にされてきている。保育者は絵本を通して子ども達が出会う世界観や新たな表現、言葉の育ちを視点におきながら、それらが豊かに育まれるための環境についても考えていくことが必要だと言える。

以上、保育所保育指針の領域「言葉」で示されている絵

本の読み聞かせに関する内容を基に、保育での読み聞かせの取り入れ方について、発達別に整理していった。共通して言えることは、絵本は単に読み聞かせをするための保育教材ではなく、絵本の読み聞かせをすることで、あるいはその絵本の内容に触れることで、子ども達のどのような経験や学びにつながるのか、さらには読み聞かせをすることで、子ども達の生活や遊びがどのように発展していくのかを考えて取り入れられる必要があるということである。

5. 養成課程における読み聞かせの取り組み

では、保育者養成校での読み聞かせの指導は、どのような視点でなされているのか。その動向を先行研究から探っていく。

岩谷と上月[27]は、自身の読み聞かせ指導を振り返り、保育を学ぶ学生の読み聞かせに関する知識や技術の認識の甘さを指摘している。例えば絵本の選書については、自分の好みや思い付きで安易に選ぶ、また事前の準備において下読みが不十分であるため、絵本の内容をくみ取ることができていないまま本番に臨む傾向にあると言う。さらに読み聞かせの場面については、主活動の前の集中させるための手段のほか、給食前、降園前のわずかな時間を利用して行うことが習慣となっており、絵本の内容を伝えるためのねらいが達成できないだけでなく、計画性や保育技術を高めていくことになっていないことを指摘する。この状況を踏まえ、読み聞かせ指導の方向性として、①導入を次の活動につなげるために、絵本のねらい(子どもに何を育てたいか)を明確にもち、それが達成できるように、読み聞かせに興味・関心が高まる工夫をすること、②絵本選びや読む練習など事前の準備に十分な時間を掛けること、③読み聞かせ後のふり返りの捉え方、扱い方について、絵本を通して子どもが何を感じたかを重要視すること、の３点を整理している。岩谷らの研究からは、絵本の選書段階で、絵本を読む意味、読み聞かせがもたらす影響、読み聞かせによる子ども達の経験や気づき、学びという部分にまで学生の意識は至っておらず、読み聞かせ指導の課題になっていることが読み取れる。

このような課題の傾向は他の先行研究からも同様にうかがえる。例えば小熊[28]は、保育者養成課程の「保育内容の指導法言葉」の授業を受講する短大生140名への質問紙調査から、読み聞かせ後のふり返りを整理している。結果は、読む際の声の大きさや強弱、抑揚など自身の読み方に関する反省が多く見られ、「ねらいを考えて読み、評価し次の課題につなげた」という、読み聞かせのねらいや意図に関する回答はわずか１名であった。また、学生が捉える今後の課題については、ふり返り同様、読み方についての反省が主となっており、ねらいを踏まえた読み聞かせについての回答は確認されていない。

他にも滝浪[29]は「保育内容指導法演習(言葉・環境)」での読み聞かせ演習から、学生の学びの成果を①読み聞かせの意義や重要性の理解、②読み聞かせの技法、③選書の大切さへの気づき、の３点にまとめている。特に①については、読み聞かせによる子ども達の想像力、共感力、感受性の獲得のほか、子どもとのコミュニケーションをとる上で大切なものという解釈でまとめられており、絵本を読む意味や読み聞かせのねらいという視点では確認できなかった。

また、山田[30]は保育の中で絵本を効果的に活用し実践していけるように、保育者を目指す学生に対してどのような指導が必要かを、学生への質問紙調査から４点整理している。具体的には、①絵本の魅力を深く味わう体験をすること、②絵本の知識を得ること、③読み聞かせの技術を身に付けること、④子ども達と絵本を共に楽しむ感性をもつことの４点を挙げている。ここでも学生自身の経験や技術に特化した指導の視点が中心になっていることが読み取れる。

以上を踏まえると、限られた先行研究からの把握ではあるが、保育を学ぶ学生の読み聞かせ実践においては声の出し方、目線の向け方、読み聞かせの始め方や終わり方、絵本の持ち方、年齢や季節、行事を考えた選書など、技術面での視点が強い傾向にあることが分かる。しかし、先で述べた通り、実際の保育現場では、絵本を通した子ども達の経験や学び、どのような意図をもって選書し、読み聞かせをするかという保育者のねらいが重要となる。よって、保育で読み聞かせをする意味や意義についての理解、さらには保育実践で絵本を教材として取り入れる保育者の意図についての指導は、今後の読み聞かせ指導における課題の一つになると考える。

6. まとめ

本研究では、先行研究ならびに保育所保育指針を基に、保育での絵本の読み聞かせの重要性について整理するとともに、読み聞かせの指導において保育者養成校に求められる指導について考察していった。結果について、以下の２点にまとめる。

- 読み聞かせの意義として、読み聞かせにおける絵本は、子どもとのコミュニケーションツールとなること、そして読み手と聞き手との信頼関係、愛着関係形成において、重要なアイテムの一つになること。
- 子ども達の豊かな経験や知識、活動の発展に向けて、保育者は意図をもって絵本を選書し、読み聞かせを行うことが重要であること。保育者養成校では、この視点を含めた指導が求められること。

保育所保育指針からも分かるように、日々の保育の中で、絵本の読み聞かせは子ども達の成長や発達に大きな刺激となることは明白である。保育者養成校では、様々な授業、機会において、乳幼児期における絵本の大切さを伝え、指導していく。しかし、絵本の読み聞かせについて、保育を学ぶ学生たちは選書から実践、ふり返りに至るまで、関心をもって取り組んでいるものの、保育所保育指針で示されている絵本や読み聞かせの意義を踏まえた取り組みになっているかは、残念ながら先行研究の動向からは把握できなかった。先でも述べた通り、保育所保育指針では、絵本を介して保育者が子ども達のさまざまな気づきや経験、さらには活動の充実や広がりにつながるよう、意図をもって関わることが示されている。保育者養成において、この視点をも含めた指導、実践分析が必要であると考える。この点については、今後の更なる課題として検討していきたい。

7. 引用・参考文献

1）肥田美代子："認定絵本士養成講座　絵本は生きる力の火種となる"、p. ii (2020)（絵本専門誌委員会　独立行政法人国立青少年教育振興機構）

2）全国大学生活協同組合連合会：第57回学生生活実態調査概要報告、p.17、https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf_report57.pdf（2022）

3）平山祐一郎：大学生の読書の変化－2006年調査と2012年調査の比較より－、読書科学、第56巻第２号、pp.55-64（2015）

4）吉田昭子：大学生と読書－読書環境の変化３－、文化学園大学紀要、第54集、pp.59-65（2023）

5）工藤真由美：保育者にとっての絵本に関する一考察、四條畷学園短期大学紀要、第49号、pp.40-46（2016）

6）新村出編："広辞苑第七版"、（2018）、（岩波書店）

7）秋田喜代美監修・東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター編著："保育学用語辞典"、（2019）、（中央法規）

8）秋田喜代美監修・東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター編著：前掲書７）、p.117

9）秋田喜代美監修・東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター編著：前掲書７）、p.294

10）真﨑由美子：絵本の読み聞かせにおける効果と臨床心理学的意義、甲子園大学紀要、第45巻、pp.55-58（2018）

11）野口隆子：もう一度考えよう絵本のチカラ、プリプリ2023年11月号、pp.8-11（2023）

12）厚生労働省編："保育所保育指針解説"、pp.80-81、（2018）、（フレーベル館）

13）文部科学省編："幼稚園教育要領解説"、pp.70-71、（2018）、（フレーベル館）

14）内閣府・文部科学省・厚生労働省："幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説"、pp.64-65、（2018）、（フレーベル館）

15）並木真理子：幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発達に及ぼす影響、保育学研究、第50巻第2号、pp.75-89（2012）

16）馬見塚昭久："保育学生のための「幼児と言葉」「言葉指導法」"、pp126、（2022）、（ミネルヴァ書房）

17）真﨑由美子：前掲論文10）

18）横山真貴子・水野千具沙：保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義－５歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から－、教育実践総合センター研究紀要、第17巻、pp. 41-51（2008）

19）厚生労働省編：前掲書12）、p .111

20）厚生労働省編：前掲書12）、p .157

21）厚生労働省編：前掲書12）、p .248

22）厚生労働省編：前掲書12）、p .249

23）厚生労働省編：前掲書12）、p .258

24）厚生労働省編：前掲書12）、p .262

25）厚生労働省編：前掲書12）、p .262

26）厚生労働省編：前掲書12）、p .263

27）岩谷恵利子・上月康代：保育者養成校における絵本の読み聞かせの技術習得に関する一考察、姫路日ノ本短期大学研究紀要、第42巻、pp.23-31（2019）

28）小熊真弓：絵本の読み聞かせからの学び－保育者を志す学生の実習体験から－、千葉敬愛短期大学紀要、第44号、pp.11-17（2022）

29）滝浪常雄：幼稚園教育養成段階で読み聞かせを学ぶことに関する一考察－保育内容指導法演習（言葉・環境）の実践から－、名古屋学院大学教職センター年報、第６号、pp.9-16（2022）

30）山田秀江：「絵本の読み聞かせ」に関する一考察－学生の読み聞かせ体験の実態調査より－、四條畷学園短期大学紀要、第50号、pp.38-47（2017）